

今年もご注意を ウンカとカメムシ

令和3年の梅雨が明けた。平年比では沖縄・奄美・四国を除き各地域で2～12日早い梅雨明けとなった。昨年は長梅雨であったが本年は沖縄を除く地域では10～18日も早い梅雨明けとなった。今年の主産地におけるイネに関する情報と言え、関東では千葉や茨城の早期栽培地域では出穂期を迎えているが移植直後は大風に見舞われて葉先が痛んで活着が遅れた。梅雨末期の局地的な大雨により埼玉・茨城・栃木の順でイモチ病の注意報が7月7日より順次発出された。東北地域では春先の低温により表層剥離とアオミドロが多発し活着遅れや初期分けつの発生停滞やイネがとろけてなくなる、除草剤もガッチリ効いてない圃場が多くみられヒエやオモダカもよぼよぼしているのが見られている。また、ドロオイムシも幼虫で消えていなくなるのではなく、葉に繭がついて真っ白に食害されている圃場も散見されている。ただし、生育状況については全般的に活着期を過ぎた6月辺りからは平年より気温が高く推移しイネの生育は旺盛になりほぼ平年並みとなっているようだ。

農水省が発表する病虫害発生予報（発表は第5報7月16日現在）ではこれから気をつけなければいけない事象としては、昨年ダメージが大きかった関東以北ではカメムシ、東海以西では通称「秋ウンカ」とも呼ばれているトビイロウンカによる坪枯被害であろう。既に四国ではトビイロウンカは「多い」と予報されており、東海以西についても「やや多い」と発せられている。捕虫器や網取でもトビイロウンカが入るようになってきたようだ。梅雨明け前は九州西南地域から帯状に伸びた降水帯が伊豆諸島付近まで伸びて典型的な梅雨時期の空模様を呈してしたが、このジェット気流に乗って中国大陸からトビイロウンカが飛来してくる。昨年は九州北部の大分や福岡でトビイロウンカの食害被害による坪枯現象が多く見られたので記憶に残るところだ。東海以西の水稻を栽培されている方々については、今後はウンカの発生情報に耳を傾けて圃場の状況も良く確認して頂くことをお勧めしたい。



(左) トビイロウンカの成虫
 (右) クモヘリカメムシ

出典：病虫害防除指針より

次に関東以北の水稻栽培において注意したい事象はカメムシだ。昨年の関東以北では長梅雨に見舞われ日照不足も悪影響して草丈は徒長し倒伏した圃場が多く見られた。長梅雨が影響したためにイモチ病発生に好都合となる気象条件が重なり被害に見舞われたのは記憶に新しい。昨年を除き関東地方ではここ数十年はイモチ病が大発生したという事がなかったため、生産者の中には初めてイモチ病に見舞われたという方がいたほどだ。関東では移植後のイモチ剤はそもそも需要がなくメーカーも対処剤をほとんど在庫として持ってなかったため混乱に至った。ただ関東の梅雨入りは平年よりも7日遅く、7月19日に梅雨明け宣言がなされたので空梅雨とも言える。梅雨明け一転、全国で一気に30℃以上の最高気温をマークする日が続いており夏本番となった。1ヶ月予報でも全国的に気温は高めに推移する予報にて各県に発出されているイモチ病の注意報は昨年の様な警報級とまでは至らないのではないかと予察しているが果たしてどうなるだろうか。

これからの栽培管理で一番注意したい事はカメムシ防除だ。温暖化の影響もあってカメムシは関東以北でずいぶん悩まされており色彩選別機が大活躍した。越冬虫が増加しておりこれは防除を徹底するしかなさそう。生産現場においては出穂期前までにはカメムシの飛来ポイントとなる畦周りの雑草を徹底的に刈っておくことと、所有している田んぼの周りに山林があるところは特に要注意で必ず山林にはカメムシが潜んでいる。あとポイントとして出穂前に収穫を迎える果実類は最初の餌食となりやすい傾向があるようだ。よって、先に果樹類にカメムシが付いて吸汁するので果樹農家に今年は例年と比べて吸汁痕が多いかどうかもしらサーチしておくのも良いだろう。まだ出穂期を迎えてい

(次ページへ続く)

ない東北地方でも昨年はカメムシの被害が大きかったが福島県でイネの生育調査をしていると既に圃場内にてクモヘリカメムシの飛来を確認している。千葉県では出穂期を迎えた早生品種にホソハリカメムシが飛び回っているのを確認している。天塩にかけて作ったコメに被害痕があって格付けがダウンするのはあまりにも切なく忍びない。また、色選を通し直しともなると作業も経費も負担が余計にかかるため手間をかけないためにも徹底した防除に努める事をお薦めしたい。

高知県の野菜・果物のお話

当紙で以前に高知の「しょうが」を取り上げてご紹介しましたが、高知県について色々調べて見ますと、しょうが以外にも全国収穫量1位の野菜がありました。農水省統計によると、しょうが/19,600トン(全国シェア42.06%)、みょうが/4,885トン(同90.68%)、ししとう/2,900トン(同39.89%)、にら/14,800トン(同25.3%)、なす/39,300トン(同13.08%)。「みょうが」はほぼ高知県産と言ってもいいでしょう。高知県ではハウス栽培で通年出荷していますが、6月～10月過ぎの夏から秋にかけての間が旬で、他産地の秋田・奈良・群馬などでは露地栽培で生産されているようです。しょうがの仲間で香味野菜として、古くから親しまれているようですが、食用として栽培しているのは日本だけだそうです。和え物にみょうがが出てくると夏を感じますね。

因みに、果物の全国収穫量1位は、ブンタン(文旦)/1万2,024トン(全国シェア94.45%)、ユズ(柚)/1万60トン(同51.33%)。ブンタンとは、中国・台湾辺りの南方が原産とされ、江戸時代に日本に伝わったと言われているようです。土佐文旦は、鹿児島県の法元(ほうが)宅にあった古木と考えられ、鹿児島県果樹試験場のオオタチバナ(大橘)と同一品種或いは同一グループの柑橘在来品種。昭和4年に高知県果樹試験場に法元文旦として苗木を植えたものが原木とされている。高知県内でも土佐市が約半分を占める一大産地。特徴としては、果実は大変大きく(1個2Kg以上あるものも)外皮は分厚く種がたくさん入っているが、程よい酸味とシャキシャキした歯ざわりを楽しめる。シーズンは、12月～2月に収穫し、1ヶ月ほど貯蔵して追熟・減酸させてから出荷する。酸味が好きな方は出始めを苦手な方は後半のものを選ぶと良いそうですが、購入後、暫く保存しておくで減酸して酸味が少なくなるのでお試しを。何故文旦は種が多いのか、温州みかんは花粉が少なく、受粉しなくても実が出来る単為結果性という性質をもった品種。対して土佐文旦は花粉が多く自家受粉(何もしなくても自分で受粉する)があるので、種がたくさん出来ます。自家受粉でも実をつけるものの、きれいな丸い形にならなかつたり、大きくならなかつたりするため、5月初旬頃の開花時期に人工授粉して、大きく丸くたくさん種が入るよう実をわざと育てているそうです。最後に「シュガートマト」をご紹介します。高知龍馬空港の売店にも置いてあり、日経新聞が行ったバイヤー調査2017年で1位に選ばれた、高岡郡日高村で水分を枯れない程度にコントロールして栽培されているトマト。フルーツのような甘さがあるのが特徴。通常のトマトは糖度5程度、フルーツトマトと称されるものが糖度7程度、シュガートマトは8度、中には10度以上のものもある果肉が詰まった甘さと酸味のバランスが取れたトマトです。高知県には、鰹のたたきを始め、美味しい食材が数多くあります。また、「四万十川」や、土佐市・日高村近隣を流れる仁淀川は「仁淀ブルー」と言う言葉があるほど透明度抜群の清流です。コロナが終息したら、是非一度高知を訪れてみてはいかがでしょうか。



シュガートマトを栽培している施設

東京オリンピックが開幕し都内各所で熱戦が繰り広げられています。始まってみると競技場で観戦できないのは少し残念ですが、時差もなく中継が多いのでお家でテレビ観戦を楽しんでいます。国を代表して真剣に戦う姿は心から応援してあげたいですね。頑張れニッポン！編集事務局：南部、助川